

JAAGA 創立 30 周年に寄せて



第 11 代 JAAGA 会長
齊藤 治和

1996 年（平成 8 年）に誕生した JAAGA が今年 2026 年（令和 8 年）で創立 30 周年を迎えられたことに対し、先ずは心からのお祝いを申し上げます。

この 30 年間を振り返ると、我々の世界は冷戦後の劇的な情勢の変化の波に洗われながら顕在化した様々な新たな対立や、世界各地での悲惨な紛争を見てきました。また、国境という既成概念の枠を越えた経済のボーダレス化や相互依存化という枠組みや、地球規模での問題解決のための協調的アプローチといった様々な新たな概念や国際間連携の進化も経験してきました。

なお、JAAGA 創立の 1996 年という時代における我が国を取り巻く安全保障環境に関し「日米エアフォース友好協会設立趣意書」では以下の様に描かれています。

米ソというスーパーパワーの二極間対立構造の枠組みの中で、日米同盟を基本とした相互の理解と協力のもと、我が国の平和と独立を維持してきた努力に対して、冷戦の終焉がもたらした平和の配当への希求と軍事力に対する忌避感という国内外世論の高まりを受け、従来までの努力に水を差すような様々な懸念や事案が我が国内でも見られることに対して、強い危機感が表わされています。

特に航空自衛隊は、その創設以来、米空軍から様々な絶大な支援を受けながら密接に連携し、我が国の空の守りを続けてきたという思いから、その危機感を払拭して、引き続き日米の空軍種間で強い紐帯を維持し続けることが、我が国の安全保障にとり不可欠であると強調しています。

その様な考えのもと、航空自衛隊 OB 組織「つばさ会」の下部組織としての JAAGA の活動にあたっては、我が国に所在している在日米軍、米空軍の将兵に対する激励及び士気を鼓舞することが日米相互の信頼を深化させ、現役隊員達を強力にバックアップするという認識、決意が述べられています。

日米の関係を時の流れの中で俯瞰するに際して、JAAGA 創立の 1996 年と 2026 年現在とでは、とりわけ米国自体が目指す国家の在り方、国際社会での基本的な立ち位置等の変遷が大きな影響を及ぼしていることは事実です。

冷戦を勝ち抜いたこの世界での唯一のスーパーパワーであった米国は、湾岸戦争、

9.11 という未曾有の危機、イラク戦争、軍事・経済両面におけるライバルとしての中国の台頭等といった戦略上の多くの重要な節目を経て、世界の警察官としての役割の否定にはじまり、同盟国や友好国に対しての「安全保障のただ乗り」への非難はこれまで以上に厳しく、自らが果たすべき応分の努力と、貢献を強力に求めています。特に、第二次大戦後の対ソ（対露）欧州安保の要である NATO（加入国）に対する米国の基本的スタンスにも、従来までは見られなかった厳しい論調が伺えます。

このように、国家間関係の姿を見る際には、それぞれの国、地域での時の政権の考え方、国内外の政治情勢等が色濃く反映された姿が目につきやすく、場合によっては新たな緊張や、対立が生まれることも否定できません。

しかし、JAAGA が目指す個人や組織に対する激励や士気を鼓舞する活動は、心に訴えかける活動であり、時の政権の考え方や政治情勢といった流動的な要素に左右されるものではありません。

相互の立場の違いを超えて、国民の幸せな暮らしを守るという仲間同士としての理解、異なる国民同士の友好と信頼に基づいた相互理解へと結実していくものです。

ここで小生が現役時代に日米（空軍種間）での立場や見解の違いを局限化する努力の際のひとつのキーワードを思い出します。

「ハワイの司令部で我が国を見る目線とワシントン（ペンタゴン）から我が国を見る目線は、やはり違うことが多い」ということでした。

そのため、先ずは在日米軍（米空軍）のメンバーに正しくわが方の状況を理解してもらい、次いでハワイの司令部のメンバーにも、在日米軍（空軍）を通じて目線を共有してもらう努力を怠らないことを重視しました。

次いでペンタゴンでは、わが方からの直接のものとハワイの司令部を通じて、我が国に対する目線を共有して、理解してもらう努力を様々なルートで行うことを重視しました。

そのためには、普段からの意思疎通と相互理解が何よりも重要であり、信頼に基づく理解（業務のみならず余暇の際の相互理解を含む）無くして相手の共感決して得られないことに重きを置いたものでした。

なお、小生が JAAGA 会長在任時に当時のブラウン太平洋空軍司令官が米空軍参謀総長として栄転されることが決定された際には、まさしくこの考えがスムーズに叶う一助となるものと感じたものです。

（ブラウン司令官は名誉会員として JAAGA に入会されました。）

生まれ育った米国の故郷の街から遠く離れ、日本での勤務を続けている在日米軍、米空軍の将兵の仲間達、並びに将兵と共に日本に住む家族の方々を含めた日米での温かな心の交流が日本を離れた後でも良き思い出として残り、日本に対する理解の素となり得るようにお手伝いすることの意義は創立以来 30 年が経っても変わらず、またこれからも変わらず続けていく必要があるものと思っています。